

## 【音楽科】教科提案

### 「つなげる」ことでせまる音楽の魅力 ～思いや意図をもって表現できる子どもに～

#### 1. 研究テーマ設定の理由

##### (1) 学校提案とかかわって

音楽科ではこれまで6か年にわたって「比べる」をキーワードに、小グループにおける「協同的な学び」の実践・実証を重ねてきた。質の高い「ジャンプのある学び」成立の要件として、目標設定をはじめ教材選択や課題設定の良否が挙げられた。また、繰り返される旋律やさまざまな反復のかたちなど、音楽的な要素や音楽の仕組みに注目したり、比べる活動を取り入れたりすることで子どもたちの学びの質が高まっていくことも確かめられた。

本年度は学校提案「問い続け、学び続ける子どもたち」を受けて、音楽科では子どもたちを主体とした「つなげる」をキーワードとする。生涯にわたる音楽的な「自己教育力」の育成につながる要件を明らかにするとともに、「思いや意図をもって表現できる子ども」をめざしたいと考える。また、音楽科における「問い続け、学び続ける」とは、授業で身に付けた基礎的・基本的な知識、技能や学習したことを使って、意欲的に工夫しながら表現したり鑑賞したりすることであると考えている。この問い続け、学び続ける姿が、生涯を通して音楽を楽しむ態度と習慣を育てる基盤になればと願っている。そのために、次の3つの「つなげる」ことを大切にする。

##### ①教材（楽曲）とつなげる

教材がもっている魅力・味わい・多様性を感じさせることによって、「面白そうだな。」「もっとやってみたいな。」と一人一人が夢中になって音楽に触れ合い、学び合えるようにしたい。歌詞や楽譜、演奏、背景などに触れて、一人一人が教材と深くかかわれる学びの場をつくる。そうすることで、新たな教材と出合ったときに、子どもたちは自らの力で教材のもつ魅力・味わい・多様性を発見し、自分と教材をつなげて学びを進めていくことができると考える。

##### ②仲間とつなげる

仲間の気付きや奏でる音に耳を傾けて聴き合える関係づくりを行う。また、言葉や音を介して協同的に音楽活動に取り組むことで、楽曲のもつ価値を見出したり、共に表現したりすることで自分と仲間のつながりを実感できるようにする。仲間とのつながりを実感することが、学習意欲を高め、学ぶ楽しさ・喜びにもなると考えている。

##### ③自分とつなげる

過去の経験や既習内容を生かして音楽をつくったり表現を工夫したりすることができる力を育む。また、自分の学びを振り返り、「こんなことができた。」「表現を聴いてもらえた。」と達成感を味わうことで、「次はこんな表現をしてみたい。」と学び続ける意欲をもてるようにする。

## (2) 音楽科でめざす子ども像

「音楽が好きだ・歌いたい・演奏したい・つくりたい・いろんな音楽を味わって聴きたい」さらに「仲間と歌ったり演奏したりしたい・仲間が好きな音楽や音楽表現に興味がある」「気持ちを込めて音楽を表現したい」など、学習意欲が高く、思いや意図をもって表現し、夢中になって学ぶ子どもをめざす。そのためには、音楽的「知識・理解(knowledge & comprehension)」「技能(skill)」「能力(ability, capacity)」の3つがバランスよく身に付いていることが必要になるであろう\*。そこで音楽科がめざす子どもの姿を次のようにした。( \*ここで言う「能力」とは、「思考力・判断力・表現力」の総称である。)

音楽的「知識・理解(knowledge & comprehension)」「技能(skill)」「能力(ability, capacity)」の3つが、音楽的関心・意欲・態度に支えられてバランスよく身に付いている子ども

上の3つを身に付けることで、自分に合った生活スタイルを見つけ、自分を音楽で豊かにし、生涯音楽の基盤を手に入れようとする子どもになっていくと考える。同時に工夫して音楽を表現したり、仲間との関わりからも自分の音楽的世界を広げたり、つなげようとしたりする子どもが育つと考えている。

## 2. 音楽科学習における「問い続け、学び続ける子どもたち」

### (1) 音楽科における“問い続け、学び続ける子どもたち”の姿

学びを追究する子ども

- 音楽のよさや面白さ、美しさを見出そうとする
- 音楽的感受性を研ぎ澄まして、こだわりをもってより良い表現をしようとする
- 多様な音楽や表現方法に触れ、気付いたことを自分の表現に生かそうとする

他者との関わりを大切にする子ども

- 仲間の考えや演奏を尊重して聴こうとする
- それぞれが感じたこと、分からないことなどをペアやグループ、集団で共有しながら、積極的に関わり合いを求め、学び合おうとする
- 一人では表現しきれない思いや意図を仲間と共に表現しようとする

学びを実感する子ども

- 学習したことを使って、工夫しながら表現したり鑑賞したりしようとする
- 基礎的・基本的な知識、技能を確実に身に付け、活用しようとする
- 自分の表現や気づきをみつめようとする

### (2) 音楽科における子どもへのみとりと支援

教師と子どもの関係をまずつくり、子ども同士の関係づくりへと広げていくことはもちろんである。加えてそのために、みとりと支援については下記の5つのことを重点的に進めていく。

#### ① 細やかな評価規準や評価計画の作成

短期的、または長期的な視点で一人一人の学びの深まりや変容をみとり、どのような支援が必要であ

るかを考えて学習を展開していくようにする。

## ②ICT 機器の活用

子どもたちの興味・関心を広げたり、より学習状況を把握しやすくしたりする。

## ③ワークシートの工夫

考えや思いが的確に表現できるようにする。

## ④長期的に子どもの学びをみとる

①③を活用し書き込み状況を記録（コピー等）し、個人カルテとしていく。

## ⑤子どもたちの関係性をとらえる

仲間とどのように関わり合い、支え合って学びを深めているかなどの子どもの関係性を関係図や座席表に記録し、把握する。

上記の①～⑤を教師がつなげて様々な視点から子どもたちをみとることで、より充実した支援ができると考え、進めていく。

### （3）事例：3年生の実践から 「くりかえしや変化をつかって、まとまりのある音楽をつくろう」

（2015/7/8 本時）

本題材では、反復や変化などの音楽の仕組みを生かして、4小節のまとまりのあるリズムをつくることをねらいとしている。本時では、さらに発展的な学びとして、個人でつくった4小節のリズムを3人グループでつなぎ合わせ、グループで一つの音楽をつくる実践を行った。「問い続け、学び続ける」子どもの姿をめざして、題材を通してリズムリレーを常時活動として取り入れた。

#### 教材・仲間・自分とつなげる～リズムリレー～

一斉に演奏するばかりでなく、もっとそれぞれが自分の奏でる音・音楽などに向き合える場をつくりたいと考え、授業の始めの10分などを使って手拍子などによるリズムリレーを取り入れた。リズム感を養い、リズム打ちの面白さを感じ取らせるために、拍の流れにのって即興的にリズム打ちをするリズムリレーをいろいろなパターン（まねっこリレー・サンドリレーなど）で行った。「今日はクラスのみんなはどんなリズムを打つのだろう」と誰もが仲間の打つリズムに耳を澄ませている姿が見られた。はじめは手拍子だけで行っていたが、子どもたちから「体の他の部分を使いたい」という意見も出され、次第にそれぞれが思いをもって工夫しながらリズム打ちするようになった。

本時の実践では、このリズムリレーで身に付けてきた力（「拍の流れにのってリズム打ちする力」や「いろいろなパターンでリズムをつなげて演奏する力」）を生かしながら学びを進めていく子どもたちの姿があった。子どもたちが気に入っていた「まねっこリレー」を使ってリズムをつなぎ合わせようとするグループが多かった中、「サンドリレー」を選んだグループがあった。はじめは「まねっこリレー」で演奏しようとしたがなかなか拍の流れにのれずいろいろと試す中で、今回は「サンドリレー」が拍の流れにのって演奏しやすいことに気付いた。



また、本時までの個人活動では付箋を用いてつくったりリズムを楽譜化した。音符をかいたり読譜したりすることに苦手意識をもっている子ども題材を通して学習意欲を持続させながら楽しんで取り組めた。

### 3. 研究の展望

音楽科では、子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けるために、「つなげる」をキーワードに表現及び鑑賞の楽しい活動を通して、音楽の魅力に迫りたい。思いや意図をもって表現できる子どもを育てるために、以下の方法で問い続け、学び続ける子どもたちをめざす。

#### ①教材がもつ高い価値に出合わせる

質の高い学び合いをめざすためには、まず教師が教材のもつ価値をどれだけみとることができるかが鍵となる。教材研究を深め、その音楽がもつ美しさや面白さに一人一人が夢中になり、より高い価値を子どもたち自身が生み出していけるような題材設定を行っていく。

#### ②聴き合い、仲間とつながる学習環境をつくる

「静かにしなければいけない」のではなく、「静かにして聴きたい」と思えるような音・演奏者の思いを大切に授業の雰囲気をつくる。また、仲間とつながることができる教材・学習課題を教師が用意する。子どもの発達段階や状況に応じて、ペアやグループ、あるいは集団で思いや意図・考えを共有できるようにする。

#### ③子ども同士のつながりをとらえる

子どもたちがどのような仲間との関わり合いの中で学びを深めていくのかをとらえていく。子ども同士が支え合いながら学び合っていく姿に着目することで、教師がどのタイミングで支援すべきであるかが見えてくると考えている。子ども同士のつながりを記録し、子どもたちの関係性をとらえながら授業を展開する。

### 4. 研究の評価

次の①～③を評価するために、子どもの表情・発言・演奏・ワークシートなどを記録し、評価の材料とする。1時間の授業ごとに評価するだけでなく、題材や1年間を通して、長期的な視点で評価する。

①教材とつながる活動を行うことで子どもたちの学びの姿が変化したか。思いや意図をもって表現することに生かすことができたか。

②仲間とつながる学習環境を用意したり、子ども同士のつながりをとらえたりすることで、すべての子どもたちの学びの深まりが見られたか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもたちが改善されたか。

③自分とつながること（過去の経験や既習内容を生かして学びを進めていくこと）や学びを振り返ることで、すべての子どもたちの学びが高まり、達成感を味わう姿が見られたか。また学級の子どもの学びが、客観的に変化の様相を見せたといえるか。

#### 【参考文献】

[1] 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 音楽編」教育芸術社

[2] 金本正武・坪能由紀子(2009)「平成20年度版 小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり 音楽」東洋館出版社